

有職文様とは、平安時代の宮廷文化に根ざす「有職故実」に基づき、装束や調度品などに用いられてきた文様のことです。本来、**有職文様は金糸や箔を用いず**、正絹の無金の生地に織り出される点に大きな特徴があります。

平安時代には、生地に金糸や箔（金属糸）糸を織り込む技術がまだ存在せず、殿上人が身にまとう最高級の装束は、絹そのものの質や光沢、色合わせの妙によってその格が示されていました。

**有職文様を織り出した生地には多色**のものも見られますが、装束として用いられる衣裳には、**二陪織物（ふたえおりもの）**が多いです。地には一色の糸で亀甲や菱などの連続文様を織り出して地紋とし、その上に別の色糸で丸紋や花文様などを浮かせて織る、**※二丁織**による錦地です。金は、用いずとも文様の構成や色の重なりによって豊かな表情を表しています。

その柄の意味、知っていますか？

# 文様を学ぶ

装束に欠かせない文様の知識。有職故実から生まれた有職文様の数は数え切れない。文様の魅力を深掘りする連載。前号の特別編に続き、人形の衣裳によく使う文様18選を紹介します。



らくくするものの限界があり、重ねることで身体を守っていたのです。こうした無金を基本とする装束文化に変化が現れるのが安土桃山時代です。舶来の生地の影響を受け、金糸や箔を織り込む技術が生まれ、能衣装や名物裂などには華やかな金の表現が用いられるようになりました。生地に金箔を貼る技法も発展し、漆や膠、ふのりを用いるほか、箔を柔らかくして生地になじませるために、卵の白身や蜂蜜を練り込んだという興味深い伝承も残されています。



このように、時代ごとの技術や美意識の積み重ねが、現在に受け継がれる有職文様や装束の美を形づくってきました。有職文様の背景にある歴史の奥行きと、無金の中に宿る洗練された美の魅力を感じ取っていたければ幸いです。



監修者

文様の案内人 松井幸生さん

1962年京都府生まれ。株式会社誉勘商店社長で金襴織物・裂地の製造卸商を営む。1751年創業、誉田屋勘兵衛から数えて13代目。「にんぎょう日本」では連載「教えて先生！日本人形の衣裳にとことん迫る」の監修者として活躍。京人形商工業協同組合理事。平成12年伝統的工芸品産業審議会臨時委員任命。翌年、伝統的工芸品産業の経済産業大臣賞を受賞した。

参考文献

八條忠基著『有職文様図鑑』（2020年、株式会社平凡社）

裂地画像提供

株式会社誉勘商店

## 有職文様



皇族女子の唐衣



古代小葵文様

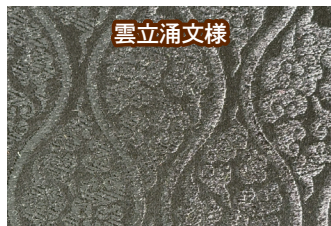


雲立涌地向蝶丸文様



桜立涌文様

皇族女子の唐衣



雲立涌文様



桐襠陪臚文様



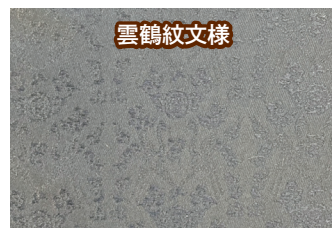
縹縹紋文様

皇族女子の唐衣



枝桜文様

五節舞表着



雲鶴紋文様

## 能装束文様



唐織蔦唐草紋文様



亀甲地梅花紋文様



唐草鳳凰文様



唐織秋草文様



唐織蔦唐草文様



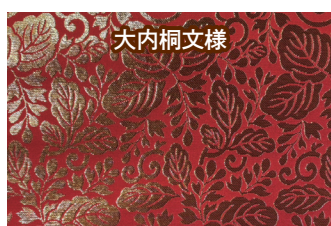
唐織極楽蜀江文様

## その他



ぶどう唐草文様

正倉院文様



大内桐文様

名物裂紋様



宗薫緞子文様

名物裂紋様